

The Learner

Doshisha International Academy Elementary School

July
ISSUE



July, 2025
Volume 158

問題発見

今年の6月は、近年になく暑い日が多かったという印象です。全国各地で35℃超えの猛暑日が続出し、梅雨の時期にもかかわらず盛夏を思わせる状況でした。このような気候を目の当たりにすると、多くの人は「地球温暖化」が原因になっていると考えます。本校に一番近い観測地点である京田辺の7月の月平均最高・最低気温を見てみますと、1984年では最高30.4℃、最低22.5℃でした。その20年後にはそれぞれ33.5℃と22.9℃になり、さらに20年経った昨年は34.3℃と24.4℃になりました（いずれも気象庁のデータ）。この限られた数値だけで議論をすることは厳に慎まなければなりません。夏がだんだん暑くなっているというのは、単に感覚だけではなさそうです。

今日、地球温暖化が問題になっていることを知らない人はほとんどいないでしょうが、意外なことに1970年代半ばには地球の寒冷化が騒がれていました。1980年代に入っても研究者や一部の国際機関などで温暖化が問題視されている程度でした。少なくとも日本では、政府が「地球温暖化防止行動計画」を策定したのは1990年でした。地球規模の大きな問題や、ゆっくり進行する問題は、気付きににくいですし、自らの問題として認識しづらいという傾向があります。

ずいぶん前に出版した本の中で、私は「認識型問題」と「探索型問題」という2つの問題類型を示しました（真山達志『政策形成の本質』成文堂、2001年）。「認識型」は、文字通り社会の中で多くの人が問題の存在を認識しており、メディアで取り上げられることも多く、国や自治体によって対策が打ち出されることも少なくないような問題です。一方、「探索型」は、現状ではあまり気付かれていないような問題で、問題意識を持って注意深く観察したり、疑問を持って調べてみたりして初めて発見できるような問題です。今日の地球温暖化は既に「認識型」になっていますが、40年くらい前の日本では、まだまだ「探索型」だったと言えるでしょう。

目の前にある問題（認識型問題）に対して、有効な解決策を打ち出すことは、人々の安心・安全な暮らしを守り、社会を円滑に機能させるために重要なことです。し

かし、このようなアプローチは、どうしても事後的、対症療法的になりがちです。一方、まだそれほど深刻になっていない問題とか、根本的・本質的問題をいち早く発見して、早めの対応や抜本的解決策を打ち出せたら、将来にわたって豊かな暮らしが守られる確率が高まるでしょう。特に、人口減少社会に入った日本の場合は、問題解決に使える資源に限りがあるため、できるだけコストをかけずに効果的な問題解決を図る必要があります。そのためには、探索型問題を早く見つける能力がどうしても必要になるのです。

本校の教育の特徴である「探究学習」は、探索型問題の発見能力を養う上できわめて有効な学習だと思います。子どもたちは、好奇心が強く、既存の価値観や大人の常識にとらわれない発想を持っていますので、大人が気付かない問題や、大人がついつい見て見ぬ振りをしてしまう問題にも目を向けることができます。その子どもたちの素晴らしい潜在能力を最大限に引き出すのが、探究学習の魅力ではないでしょうか。ただ、探究学習は、時間とエネルギーが必要です。また、短時間で成果が出るとは限りません。いや、時間をかけた割には結果が見えないということもあります。しかし、疑問や問題意識を持って色々調べたり考えたりするプロセスが重要です。夏休みは、探究学習を深める良いチャンスでもあります。勉強をするというより、自らの知的欲求を満たすという学びになれば最高です。お子様の学びの深化と成長に、保護者、ご家族の皆様の一層のご理解とご支援をお願いいたします。

今年の夏も猛暑になりそうです。熱中症にならないとか、夏バテをしないというのは、典型的な認識型問題への対応ですが、これらにも抜かりなく、探索型問題を追求する夏にしてください。

校長 真山 達志



キリスト教教育

7月：平和 July：Peace

聖書：「私の愛するきょうだいたち、よくわきまえておきなさい。
人は誰でも、聞くに速く、語るに遅く、怒るに遅くあるべきです。」

ヤコブの手紙 1 章 19 節（聖書協会共同訳）

今から 5 年前、この紙面でミヒャエル・エンデ（Michael Andreas Helmuth Ende, 1929- 1995）というドイツ人作家が書いた児童文学「モモ」のご紹介をしました。筆者が昔とても影響を受けた物語の一つでしたが、今回は本屋で新しく「モモ」の絵本版が出ているのを発見し、嬉しさのあまり即購入して朝の礼拝で取り上げたのでした。

原作は長い物語なので、薄い絵本で全てを描いているわけではありません。しかしながら、この絵本では主人公の「モモ」が小さいながらいかに素晴らしい才能を持っていたか、それによってどれほど多くの人々が慰められ、勇気を持って人生を再出発できたかを物語っています。

「…すぐにたくさんの人たちが、モモに会いに来るようになりました。ほとんどいつも、だれかがモモのそばにすわっています。自分にもモモが必要だということにまだ気づかない人がいると、ほかの人たちが口々に言いました。『モモのところに行ってごらんよ！』」

モモの持つ素晴らしい才能—それは頭がよくてどんな人にもいいアドヴァイスができるとか、慰めを必要としている誰かにいつも正しい言葉を見つけられるとか、賢くて公平な判断ができるとか、そういったことではありませんでした。なんととっても、彼女はまだほんの子供でしたから。

「小さなモモがだれよりも得意だったのは、ほかの人の話を聞くことでした。ほんとうによく話を聞けるのは、ごくわずかな人だけです。」

モモに話を聞いてもらうと、愚かな大人たちは自分で自分の誤りを悟り、仲違いしていた人々は相手の話に耳を傾けられるようになり、自分の人生は失敗で無意味だと考えていた人は、いつのまにか自分はたった一人しかない、世界にとって特別に重要な存在だ、ということを理解し始めます。そして子どもたちはというと、何もない廃墟にいてもモモと一緒に遊んでいるだけで次々に新しい遊びのアイデアが浮かび、一瞬たりとも退屈することはありませんでした。

モモの親友であったある老人は、どんなことでもじっくりと考える人で、答えが必要ないと思った時には黙りこくる一方、答えが必要だと思った時にはその答えについて考え続け、その答えを出すまでに時には二時間、時には丸一日かかりました。当然普通の人のテンポには合わず、風変わりな人としか思われなかったのですが、モモだけは違いました。彼がそんなに時間をかけて考えているのは間違ったことを言わないようにするための慎重さだということを理解していたのでした。

注意深く人の話に耳を傾ける、というただそれだけのことで、周囲にいる人々がこれほど何もかもうまくいくなんてありっこない、それこそファンタジーの世界だ、と思われるかも知れません。筆者は子どもの頃、よく両親から「人間の耳が二つあるのに、口が一つしかない理由を考えてみなさい。」と言われたものでした。自分が語るよりももっと大切なのはまず人の話をじっくりと聞くことである、という教えであったと思いますが、傾聴というのは言うには容易いが実践するのは至難の業です。

昔ニュースで、残虐な犯罪で警察に捕まったある人の様子が新聞で伝えられました。取調官に対し、この人はこう言ったそうです。「刑事さん、僕の話聞いてくれますか。」そして突如、堰を切ったように事件の顛末を語り出したといいます。この人は物質的には豊かさに囲まれて育ちましたが、幼少期から両親を始め誰にも話し相手になってももらえず、ただ物だけをあてがわれて大きくなったのでした。モモのようにただ傾聴できる人がこの人の傍にいてくれさえすれば、隣人を巻き込むような悲劇は起こらなかったかも知れないのに…と思ったことを憶えています。

我々はせめてすぐ傍にいる家族や友人の心に寄り添い、耳を傾けられるようになりたいものです。

Christian Education Committee チャブレン石川眞弓

（引用図書）

「モモ」（絵本版） 原作：ミヒャエル・エンデ；絵：シモーナ・チェッカレッリ；訳：松永美穂

<お知らせ>

- ・7月1日（火）の朝礼拝はゴスペル SG さんによる音楽礼拝です。
- ・今月のおにぎり献金は、7月8日（火）です。



米づくりを考える

～Unit I 農業についての学び 5年生田植え体験を通して～

昔も今も日本人の主食として食べられてきたお米。日本でお米づくりが始まったのは、2500年も前の弥生時代の始まりごろでした。お米の伝来により人々の生活や住まい、国のあり方が大きく変化しました。稲作により土地や人々を取りまとめる人が生まれ、貧富の差が生まれたり、豊かな食の技術が発展したりと昔も今も人々の生活と大きく関わってきました。今年になりお米の値段がどんどん上がっている中、5年生ももちろんその話題について知っている子ども達が多く、Unit I の探究の学習で農業について学んできましたが、その時にも口々にお米の値段について話が出ていました。

「お米農家さんやってみたいですか？」私は自分に問いかけつつ、子ども達に問いかけました。子ども達からは、「やりたいくない。」「儲からなさそうだしなあ。」とあまり前向きな言葉は返ってきませんでした。私自身に問いかけてみても、時間や高価な道具を思うとなかなかやってみたいという思いにはなりませんでした。しかし、子ども達にさらに問いかけます。「どうなったら、どうやったら農家の仕事をしてみようと思いますか？」子ども達は火がついたように様々な考えを出してくれました。「お米作りの道具を政府が無料で貸してくれたらできると思う！」「1年中簡単に育つ種子を作ったら育てるのが大変じゃなくなるからいいんじゃない？」「機械で全部作業ができるようにしたらいいんじゃない？」子ども達の様々な視点からの意見を聞くとそう遠くない未来には子ども達が考えたことが現実になる時が来るかもしれないと感じました。弥生時代に稲作を始めたその当時の日本人も、天候や害虫、病気により強い水稻を作ろうと何度も何度も植え替え育ててきました。とてつもなく長い時間、たくさんの人の力でお米作りが変化してきたのです。今の5年生が考えたこともそのうちの一つとなって、またより良い稲作が行われていくかもしれないと、これがイノベーションになっていくのだと感じました。



1年をかけてお米ができる流れや弥生時代からの米づくりの変化を学んだ5年生は、実際に田植え体験をさせてもらう機会をいただき木津川市の水田に行ってきました。行く前は、裸足ですることにさえ抵抗を見せていた子ども達。「長靴でするんですか？」と質問もあったほど、昔の田植えのイメージもなかったようでした。しかし、農家さんに説明を聞き、水田を目の前にすると「もうやるしかない！」と覚悟を決め、不安定な田んぼの中へ入って行きました。一度入ってしまうと、どんどん稲を植えていく子ども達。「先生もっと稲ください！」という言葉まで聞こえるほどでした。20分ほどの時間で、60人で行なうと1つの田んぼ半分ぐらいが稲でいっぱいになりました。なかなかまっすぐ綺麗に並べて植えることは難しかったようですが、子ども達なりに昔の人の米作りを楽しんでいたようでした。その後、農家さんが田植え機で田植えをする様子を見せてくれました。子ども達は「すごい！あっという間に植えられる！」と手作業ですることとの大きな違いに驚きを見せていました。これもまた一つ、機械を活用することの便利さや利点を目の当たりにできた機会でした。帰りのバスの中では、「稲かりも行きますか？」と子ども達のお米の完成を楽しみにしている様子がありました。



米づくりについて学び考え、田植え体験を経験することで、これからの未来を担う子ども達が環境にも人にもより良いお米づくりの発展を多方面から担ってくれることに期待を抱く探究学習となりました。



探究教育

“Beyond the Textbook: Unpacking Inquiry in the PYP”

Hello everyone,

Following my introduction last month, I wanted to delve a little deeper into what the Primary Years Programme (PYP) should look like in action here at DIA. One of the most fundamental aspects of the PYP, and perhaps one that sometimes gets misconstrued, is inquiry-based learning.

You might hear the term "inquiry" and wonder what it means in practical terms for your child's education. Simply put, inquiry is about asking questions and actively seeking answers. It's not just about finding information in a book; it's about making sense of the world around us. In a PYP classroom, inquiry encourages students to:

- Wonder and ask questions: Instead of passively receiving information, students are prompted to formulate their own questions about topics. This could be anything from "How does a plant grow?" to "Why do people live in different types of houses?"

- Explore and investigate: Once a question is posed, students are guided to find answers through observation, experimentation, research, and discussion. This might involve hands-on activities, field trips, interviews, or reading a variety of sources.

- Connect and reflect: The process isn't complete until students connect what they've learned to their existing knowledge and reflect on its significance. They consider what they've discovered, how it relates to their lives, and what new questions have emerged.

The beauty of inquiry is that it shifts the focus from simply what students learn to how they learn. This approach cultivates crucial skills that extend far beyond the classroom: critical thinking, problem-solving, collaboration, and independence. These aren't just academic skills; they're life skills.

You'll see inquiry unfolding in various ways throughout our school. It might be a Grade 1 class exploring the properties of different seeds and plants, or a Grade 5 class researching sustainable solutions to global challenges. The common thread is always the active engagement of the learner.

We understand that, like any educational approach, inquiry-based learning might look different from what some of us experienced as students. It can sometimes feel less structured, but it's deliberately designed to empower students to take ownership of their learning and develop a genuine curiosity that lasts a lifetime.

As we continue through the school year, I encourage you to talk to your children about their learning. Ask them not just what they learned, but how they learned it, and what questions it made them think of. That's often where the real depth of inquiry lies.

I look forward to sharing more insights into the PYP in future articles.

皆さん、こんにちは！

先月ご紹介した内容に続き、DIAにおけるプライマリー・イヤーズ・プログラム（PYP）が実際にどのように機能すべきか、もう少し深く掘り下げてみたいと思います。PYPの最も根本的な要素の一つであり、時に誤解されがちなのが「探究型学習」です。

「探究」という言葉を耳にすると、お子様の教育において具体的にどのような意味を持つのか疑問に思うかもしれません。シンプルに言えば、探究とは質問を投げかけ、積極的に答えを探究することです。単に本から情報を得るだけでなく、私たちを取り巻く世界を理解することです。PYPの教室では、探究は生徒に次のようなことを促します：

- ・疑問を抱き、質問を投げかける：情報を受動的に受け取るのではなく、生徒はテーマについて自分自身の質問を形作るように促されます。これは「植物はどのように成長するのでしょうか？」から「なぜ人々は異なる種類の家に住むのでしょうか？」まで、あらゆる質問が対象です。

- ・探究と調査：質問が提示されると、生徒は観察、実験、研究、議論を通じて答えを探すように導かれます。これには、実践的な活動、校外学習、インタビュー、多様な資料の読解などが含まれます。

- ・つながりと振り返り：プロセスは、生徒が学んだことを既存の知識と結びつけ、その意義を振り返るまで完了しません。彼らは発見した内容、それが自分たちの生活とどう関連するか、そして新たな質問がどのように生まれたかを考えます。

探究の美しさは、単に生徒が何を学ぶかではなく、どのように学ぶかに焦点を移す点にあります。このアプローチは、教室をはるかに超えた重要なスキルを育みます：批判的思考、問題解決、協働、自立性。これらは単なる学業スキルではなく、人生のスキルです。

当校では、探究がさまざまな形で展開されるのを見ることができます。例えば、1年生のクラスが異なる種や植物の性質を探究したり、5年生のクラスがグローバルな課題への持続可能な解決策を研究したりするかもしれません。共通の糸は、常に学習者の積極的な参加です。

私たちは、他の教育アプローチ同様、探究型学習が私たち自身が学生時代経験したものと異なる場合があることを理解しています。時には構造が緩やかに感じられるかもしれませんが、これは意図的に設計されており、生徒が学習の主体性を持ち、生涯にわたる真の好奇心を育むことを目的としています。

学校年度が進むにつれ、お子様の学習について話し合うことをお勧めします。単に何を学んだかだけでなく、どのように学んだか、そしてそれがどのような疑問を呼び起こしたか尋ねてください。そこがまさに探究の真の深みがある場所です。

今後の記事で PYP に関するさらなる洞察を共有するのを楽しみにしています。



お知らせ

夏休み特別貸出はじまります

今年度の夏休み特別貸出は **7/7(月)～7/18(金)** となっています。和書・洋書5冊ずつ、計10冊の本を借りられます。
※借りたい本がしっかり入るように大きくて厚手の布バッグを用意してください。

2025 年課題図書入りました。



映画になった本を集めてみました。



←貸出0回の本。
こんな本もありますよ。
一度読んでみて下さい！

先生おススメ本→
今もたくさんの児童に借りられています。



7月の主な行事・予定

7月19日～8月31日 夏季休業日

1	火	
2	水	
3	木	
4	金	Swimming(予備日)
5	土	
6	日	
7	月	
8	火	G3 校外学習 Field trip for Kobe Animal Kingdom
9	水	クラブ/ Club activities
10	木	
11	金	
12	土	
13	日	
14	月	学期末カンファレンス(AM lesson) End of the spring trimester
15	火	学期末カンファレンス(AM lesson) End of the spring trimester
16	水	学期末カンファレンス(AM lesson) End of the spring trimester
17	木	午前授業 AM lessons
18	金	終業礼拝/ Closing worship service 学校安全点検日/ Safety check up day
19	土	
20	日	
21	月	海の日/ Marine Day(National Holiday)
22	火	
23	水	
24	木	
25	金	
26	土	
27	日	
28	月	
29	火	
30	水	
31	木	

9月の主な行事・予定

9/1(月)	始業礼拝 / Opening Worship service
9/3(水)	午前授業 / AM lesson)
9/4(木)	自宅学習日(入試のため) /2026 Entrance Exam ～5(金)
9/10(金)	G3 宿泊学習/ G3 Overnight Trip ～12(木)
9/16(火)	G6 宿泊学習/ G6 Overnight Trip ～19(金)